

A Pilot Study for a Multimodal Analysis of Japanese Public Speaking

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-05-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Fukasawa, Nozomi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00054022

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



調査報告

日本語パブリックスピーキングの マルチモーダル分析のための予備的研究

深澤のぞみ^{注1}

要 旨

パブリックスピーキングにおいて、聴衆の説得が成功するためには、もちろんスピーチの内容そのものが大きい要因になるが、非言語行動が聴衆へ与える影響も小さくない。本稿は、パブリックスピーキングにおいて発話と非言語行動がどう聴衆への説得に影響するかについて、マルチモーダル分析を行うための基礎調査である。そのために、スピーチコンテストで話し手が用いる様々な非言語行動を観察し、その概要を記述した。具体的には、視線行動、ジェスチャー、うなずき、笑いである。この中で、特に手のジェスチャーには様々な種類があり、発話と合わせて考察したとき、異なる機能を持つことがわかり、説得への影響がある可能性が示唆された。

【キーワード】パブリックスピーキング、マルチモーダル分析、非言語行動

I. はじめに

公にメッセージを発信するパブリックスピーキングは、現代ではグローバルゼーションやICTの発展とともに、良くも悪くも人々に大きい影響を与え、ますます重視されるようになってきている。このような状況のなか、パブリックスピーキングは、いかに聴衆の共感と呼び、聴衆を説得させることができるかが重要となる。説得力のあるパブリックスピーキングの方法については、いわゆるノウハウ本が数多く出版されているし、また実際に説得力のあるパブリックスピーキングとしては、例えばアップル社の創始者のスティーブ・ジョブズ氏のスタンフォード大学の卒業式スピーチ^{注2}のように人々の心に残り語り継がれているものもある。パブリックスピーキングにおける説得について研究の歴史は古く、古代ギリシャのレトリック研究^{注3}から現代の政治家の演説などの研究まで多くがされている。しかしこれらはおもに欧米を中心とし

たレトリック研究であり、日本語のパブリックスピーキングの中で行われている「説得」がどのようなものかについては、東(2006)の歴代の日本の首相の演説について調査した論考などがあるものの、それほど多くはない。

本論考は、「説得」がどのようなプロセスで実現するのかについての統合的な分析を行うための基礎研究である。パブリックスピーキングでは、単に内容のあるスピーチをしたからよいわけではなく、伝えたい内容そのもの、伝え方の言語的ストラテジー、さらに非言語行動がそろって「説得」が成功すると考えられる。そしてこれらの特徴について総合的な分析を行い、初めて説得の全体像が明らかになると言える。そこで本研究では、パブリックスピーキングの総合的な特徴を把握するために、マルチモーダル分析を行うことを目指した基礎的な調査を行う。具体的には、日本語のパブリックスピーキングの映像を、アノテーションツールであるELANを用いて分析を行い、効果的に相手を説得するための方策としてどのような要素があるのか、概要を明らかにする。

II. 先行研究

1. パブリックスピーキングに関する先行研究

日本語のパブリックスピーキングに関する研究は、前述したようにそれほど多くはないが、代表的なものを取り上げる。

まず東(2006)は、歴代の総理大臣の演説を様々な観点から分析している。たとえば話の長さや文節数、特徴的な表現などである。小泉純一郎は歴代首相の中でも長期政権を維持した首相であるが、東によると、演説の点でも歴代の首相とは異なる点が多いという。それは聞き手にとってわかりやすい、そして好印象を与えるような演説を行っていることであり、日本の政治風土にありがちな「高コンテクスト」型のコミュニケーションではなく、様々な方法で聴衆にはっきりとした歯切れのよい、わかりやすい言葉を使って訴えかけることを実現しているのだという。また学術書ではないが、平田・松井(2011)では、民主党鳩山内閣で首相演説やツイッターやブログでの情報発信に関わった経験から、「身体性」のある言葉^{注4}が聴衆—それは日本国民である場合もあれば各国のリーダーである場合もあるが—に届くのだとしている。これらの著作からは、聴衆の心に届く、すなわち説得力のある演説がどのようなイメージであるかがわかる。

深澤・小林(2012)は、パブリックスピーキングのジャンルによって聴衆の心に届くような説得の方法にも異なりがあることを、式辞スピーチとアカデミックプレゼンテーションのデータを比較することで明らかにしている。そして説得力のあるパブリックスピーキングの特徴はどのようなものなのかについては、それほど研究が進ん

でないが、深澤他(2018)では、パブリックスピーキングの一つのジャンルだと考えられる「ビブリオバトル」の分析から明らかにしている。「ビブリオバトル」というのは、5分間で自分が推薦する本についてのスピーチを行い、聴衆による投票で「チャンプ本」を決めるという書評ゲームのことであるが、チャンプ本に選ばれたスピーチは説得に成功したスピーチとして位置づけられる。「ビブリオバトル」のスピーチを「コンテキスト共有」(山路他 2014)と「メタディスコース」(Hyland 2005)^{註5}という2つの手法を援用し、投票の結果チャンプ本になったスピーチの特徴を分析したところ、スピーチで聴衆の関心をつかむためには、スピーチの導入部で聴衆と話し手の間で「コンテキスト共有」が行われ、共有した内容が、スピーチの途中や最後で覆される意外な展開を取っていること、さらに「メタディスコース」表現が効果的に用いられていることを明らかにしている。

また説得に関する研究としては、社会心理学の立場から論拠に焦点を当てたものや、メッセージに含まれる脅威の影響を調べるものなどが含まれるとされている(深田 2002)。今井(2018)は、説得を成功させるために、様々な観点からの考察を踏まえて、イソップ物語になぞらえて「北風と太陽」の「太陽」のような対応が必要だと述べている。これはいわば聴衆からの共感を引き出すためにどうしたら効果的なのかを、社会心理学の視点から提示したものであると考えられる。

2. パブリックスピーキングのマルチモーダル分析に関する先行研究

人間のコミュニケーションを分析するにあたり、人々の発話だけを対象にするのでは、決して十分だとは言えない。私たちは言葉以外の音声やイントネーション、視線行動やうなずき、ジェスチャーなどの非言語行動で多くの事柄をやりとりしているからである。非言語行動を分析した研究は数多くある。ただし高梨(2016)は、それぞれの非言語行動をバラバラに切り離して分析するのではなく、言語的な発話と時間的に共起し、言語的な発話と補完し合うことによって統合的な役割を果たすものだと述べている。このように言語行動と非言語行動の両者の関係に着目した分析をマルチモーダル分析と呼ぶ。

このような研究の先駆的なものとしては、Kendon(1967)が会話中の話し手と聞き手の視線行動について分析している。自分が話し手として話しているときには視線を聞き手に向けたり外したりを繰り返す、話者交替をして聞き手に発話権を渡すときには、聞き手に視線を向ける。さらに聞き手は話を聞いている時には、相手をじっと見ていることが多いと述べている。またGoodwin(1981)によると話し手が発話をするためには聞き手の視線が話し手に向けられていることが必要で、聞き手が話し手を見ていないときには、話し手はわざと聞き手の視線を得るような行動をすることが観察されたという。

パブリックスピーキングの分析においては、言語面だけの分析に留まるものが多い

が、籠宮他(2006)では、講演者の話し方が聴衆の印象に影響を与えていること、特にポーズや笑い、言いよどみなどが大きい役割を果たしていることを明らかにしている。また、平林・北原(2014)は、説得力の強い話者の音声は、基本周波数の最大値および平均値が高く、短いポーズと長いポーズを組み合わせることで、さらに顔の動きとして、左右方向に顔を動かしつつ、発話時には動きを止めていることを報告している。楊他(2015)は、フランスのオランド前大統領の政治演説を用い、非言語行動として眉の動きに焦点を当てて分析している。眉の上下運動については、強調したい語句の前後やその説明部分に多く現れ、眉間のしわ寄せは、困難、残虐、ショックなどの深刻さを表す語句と共に起しているとしている。

マルチモーダル分析はこれまでは会話の中における相互作用の分析などに有効な手段として用いられてきた。一方、独話であるパブリックスピーキングには、話者交替もなく会話のような相互交流はそれほど見られないと考えることもできるため、相互行為と関連がある非言語行動もあまりないはずだということになるが、果たしてどうなのだろうか。高梨(2016)は、ポスター発表のマルチモーダル分析を行なっている。ポスター発表は完全な独話ではないが、話者交替が頻繁に行われる会話とは異なる性格を持っている。そのため、参加者間の相互的な視線行動だけでなく、ポスターへの「共同注視」が重要になることを指摘したうえで、話し手の視線行動と発話単位との関係や、聞き手のうなずきなどの反応との関係、さらにポスターへの指差しとの関係などをもとに分析を加えている。

完全な独話であるパブリックスピーキングは、会話や上記のポスター発表とはまた違う特徴を持っていると思われるし、どのようにして説得力を持つかについても、言語行動だけの分析では全体像を把握できない性質があるだろうと思われる。このような場合には、マルチモーダル分析が有効な手段となることが考えられる。本論文ではこのような立場に立ち、まだあまり進んでいないパブリックスピーキングのマルチモーダル分析を行うための基礎調査を進めることとする。

Ⅲ. パブリックスピーキングのマルチモーダル分析のための基礎調査方法

1. パブリックスピーキングとマルチモーダル分析

パブリックスピーキングでは、どのような非言語行動が用いられているのか。そしてその非言語行動はスピーチ内の発話とどうかかわり、説得の効果とどう関わっているのか。これらについては、まだほとんど研究がされていない。そこで、本稿ではそのための基礎調査として、説得力があるとみなされる日本語のパブリックスピーキン

グについて、どのような非言語行動が用いられるのか、また言語行動とはどう関連して用いられているのかについて、調べてみることにした。

2. 調査方法

今回の調査は、パブリックスピーキングのマルチモーダル分析の基礎情報を得るための予備的調査であるため、データには動画が公開されていること、なるべく新しいデータが取得できるものであることを重視し、日本語による弁論大会およびスピーチコンテストの動画^{注6}を日本人話者(日本語母語話者)によるものと外国人話者(日本語非母語話者)によるものを2本ずつ、合計4本用いることにした。ビジュアルエイドを用いずに話だけを行うスピーチで、スピーチ全体の動画が公開されているものを選んだ。またいずれも、説得が効果的であった結果として賞を獲得したとみなし、最高賞などの賞を得たものを選んだ。詳細を表1に示す。

表1 分析対象の動画

	種類	タイトル	所属	時間
1	第34回土光杯全日本青年弁論大会 最優秀賞(2018年)	人口減少社会と地方再生	松下天風(高校生)	8'00"
2	第35回土光杯全日本青年弁論大会 最優秀賞(2019年)	農業で徳のある国を目指す	波田大専(松下政経塾)	8'00"
3	2017年外国人による日本語弁論大会文部科学大臣賞	おもてなして?	チャウ・エン・イ・アイリニ(マレーシア)	5'90"
4	2018年外国人による日本語弁論大会文部科学大臣賞	完璧な私って無理?	カテリーナ・ノヴィツカ(ウクライナ)	5'40"

動画は、ELAN(エラン)という動画分析ソフトを用いて、言語行動の記録とともにアノテーション(注釈)を付した上で分析した。ELANは、動画を再生しながら、様々な注釈を何層にも入れることができるソフトウェアであり、マルチモーダル分析には欠かせないツールである^{注7}。本稿で用いた動画の分析の例を図1に示す。

この欄に注釈として、発話やジェスチャーなどを書き入れることができる。

図1 ELANでのパブリックスピーキング動画の分析の例



図1に見られるように、このソフトウェアを使うと、動画だけでなく音声の波形を見ることができ、発話と合わせて、視線やジェスチャー、うなずき、笑いなどについて、タイミングを合わせて注釈として入れていくことができる。本研究でも、これらに主な焦点を当て、分析することにした。

IV. 調査結果

1. 出現した非言語行動

今回の調査は、パブリックスピーキングのマルチモーダル分析の基礎調査であるため、スピーチにどのような非言語行動が出現するのかをリスト化することを目指す。非言語行動には個人差や文化差が大きいものと思われるが、まずは全体を概観し、どのような種類の非言語行動があるのかを記述した。観察した視線行動、ジェスチャー、うなずき、笑い／ほほ笑みについて、現れた種類それぞれについて述べる。それぞれの非言語行動が現れた割合などの数値的な分析は基本的に今回は行わなかった。

まず視線行動には、「正面を見据える」「左右に視線を動かす」「聴衆と関係のない方向を見る」「原稿を見る」という種類が観察された。

次にジェスチャーについては、今回は演台で話をするタイプのスピーチであったため、おもに手のジェスチャーが中心であった。観察されたジェスチャーは多岐にわたり詳細は後述するが、「手を肘のあたりまで上げる」「手をハの字に広げる」「手を胸に当てる」「聴衆に手を差し向ける」「こぶしを上げる」「指差す」などが観察された。そのほか、具体物を示すジェスチャーも観察された。

うなずきについては、「1回深くうなづく」が見られた。また笑い／ほほ笑みについては、はっきりした笑いのほか、ほほ笑みの表情も観察された。

以下に、詳細を述べる。

2. 視線行動

今回のデータで観察された視線行動は、基本的には前述したように「正面を見据える」「左右に視線を動かす」「聴衆以外の方向を見る」「原稿を見る」であった。

今回観察したスピーチコンテストは、舞台上の中心に演台があり、そこで話し手が話をするという形で行われている。そのため、話し手はまっすぐ聴衆に向き合い、正面を見するというのが初期位置であり、それが「正面を見据える」視線行動となる(図2)。そしてその位置を基準にして、「左右に視線を動かす」ことが行われる(図3)。これは、左右に視線をまんべんなく動かし、聴衆全体を見渡すという機能を持っている。話し

手によってもその割合はやや異なり、今回は詳しくは見ないが、基本的には正面を見ていることが多く、あまり左右に視線を動かさない話者もいるし、大きく左右に視線を振る話者もいる。



図2 正面を見据える



図3 左右に動かす



図4 聴衆以外の方向を見る

次に「聴衆以外の方向を見る」という視線行動も観察された。これは、聴衆から目を離し、会場の横や上方などを見るといったケースである。図4は、話し手があることについて考え込んだことを話している部分で、聴衆に視線を向けず、話し手が自分の世界に入って考えていることを表す視線行動である。

話し手によっては原稿を見ながら話すことがあり、その場合には、下を見て「原稿を見る」視線となる。前述したように、今回データとしたのは最高賞などになったスピーチであるため、原稿を見るために下を見続けて話すようなケースはなかった。ただ、話者によって、全く見ない場合と割によく見る場合との違いはあるようであった。スピーチコンテストの種類やルールとの違いとも関係があると思われる。また原稿を見るタイミングは、発話文の切れ目の後であることが多い。

パブリックスピーキングにおける視線行動で重要なのは、やはり「聴衆を見る」ことであろう。先行研究で触れたKendon(1967)は、視線行動は会話の話者交替において重要な役割を果たしていることを明らかにしている。また、伊藤・関根(2011)では、小学校の一斉授業における教師の視線行動を観察したところ、発言する児童を見る、発言していない児童を見る、黒板を見る、という3つのスタイルが存在するという。さらに、学年が進むにつれ、会話参与者である児童の関心が教師と児童の対話から課題そのものへ移っていくことが、児童の視線行動から観察されたということが報告されている。パブリックスピーキングでは、会話や上述の授業などとも異なり、基本的には話者交替もないし、スピーチ中に聴衆が発言することもない。このような場合、話し手の視線行動がどうパブリックスピーキングの特徴や説得の効果と関連するのかは、さらにデータの分析が必要となろう。

3. ジェスチャー

本稿のデータは、会場に設置された演台のところで話し手が話すタイプのスピーチである。そのためデータに現れるジェスチャーは、話し手の上半身の範囲で行われる、おもに手のジェスチャーが中心となっている。観察された手のジェスチャーの頻度は話者によっても大きく使用に差があり、その形は極めて多岐にわたっていた。この多岐にわたるジェスチャーを、使った手や形、位置、動作、持っている機能の観点で分類をしたのが、表2である。

ジェスチャーの機能や意味は、同時あるいは直前に行われた発話とタイミングを合わせて見ることで認定した。例えば図5では、右手でこぶしを作って「国難を乗り越えるため」の「国難」の部分で強くこぶしを振り下ろしている様子が観察された。また音声波形を見ても「国難を」のところが強く発せられていることがわかり、このような場合は、「国難」を強調している機能であるとみなし、「強調」の機能とタグ付けすることにした。またこれは同時に、「力強さ」の印象を提示している。

以下、代表的なジェスチャーを取り上げ、説明する。手のジェスチャーは大きく分けると、手のひらを広げるもの、指を使うもの、こぶしを作るもの、さらに腕全体を使うものに分かれる。

まずデータに共通に出てきているものとして、自分、あるいは自分を含む集団を指す動作で、胸に手のひらを当てる動作が見られた。前述の図1に見られるように、「我々のような若者が」という発話に伴い、両手を胸に当てていることが観察された。また自分が考えるということを示す場合も、同じようなジェスチャーが用いられていることがあった。一方、聴衆や「皆」に言及するような場合は、両手手のひらを逆ハの字に広げた動作が共通して観察された(図6)。これは片手の場合も同様であった。両手を逆ハの字に広げる動作は、強調したい部分を話す時や、片手ずつ広げてリズム取りのように使われることもあった。手のひらを下に向け、聴衆からの反応を抑える動作も観察された。図7は、「働かざるもの食うべからず」と強い主張を述べ、それに対する聴衆の反応に、「会場の皆さん怒らないでください」と手のひらを下に向け抑える動作をしている場面である。



図5 ジェスチャーの機能の認定

表2 手のジェスチャーの形と機能・意味

形	使う手	機能や意味
手を少し上げ、逆ハの字に広げる	片手, 両手	強調, 「皆」
手を胸に当てる	片手, 両手	「自分」, 「思う」, 「本心」
手を聴衆の方に出す	片手	「聴衆」, 働きかけ
人差し指を自分に向ける	片手	「自分」
胸の位置で手を合わせる	両手	アジア式挨拶の模倣
人差し指を立て上に向ける	片手	強調, 「ひらめき」
人差し指, 中指, 薬指, 小指を立て, 上に向ける	片手	「1」「2」「3」「4」を数え上げる
指を折る	片手	「1」「2」「3」「4」を数え上げる
親指と小指を立て, 他の指は曲げる	片手	「電話をかける」
人差し指を横に振る	片手	否定
親指を立てる	両手	「よい」の印象提示
手のひらを横に振る	片手	否定
手のひらを下に向け, 抑える	片手, 両手	反感, 感情などを抑える
両手をほおに当てる	両手	「嬉しさ」の印象提示
両手を上げ, 振り下げる	両手	「きっぱり」の印象提示
こぶしを上げる	片手, 両手	強調, 「力強さ」の印象提示
丸めた手でリズムを取る	片手, 両手	強調, 「一緒」
遠くを人差し指で指す		「遠くの場所や事物」
腕組み	両手	「考える」
顎に手を当てる	片手	「考える」
腰に両手を当てる	両手	「強い態度」, 「非難」
髪を触る	片手	髪をはらう, 「女性らしさ」の印象提示
具体物を表す動作		



図6 両手を逆ハの字に広げて, 「皆」に言及



図7 手の平を下に向け, 抑える動作

指を使った動作は、いくつかの機能として用いられていた。例えば話の中で、「1つ目は～」 「2つ目は～」のように数え上げる場合に人差し指あるいは人差し指と中指などを上向きに立てる動作が観察された。数字そのものを示す動作も確認された。図8は、人差し指と中指、薬指を立て、「三世代同居」と言いながら「3」を作っているところである。また、何かが閃いたとか、よいアイデアであることを強調する場合にも人差し指を立てる動作が観察された。図9では、あることに気づいた瞬間を表すために「あっ」という発話とともに見られたジェスチャーである。図10では、遠くのドローンを指し示すことを表すために人差し指が使われている。



図8 三本指を立て、「3」を作る



図9 人差し指でひらめきを表す動作



図10 人差し指で遠くをさし、飛行を監視する動作

手のジェスチャーでは、こぶしを作ったり手を丸めたりする動作も観察されている。図5で述べたこぶしを作って強く振り下ろすジェスチャーは、何かを強調する際や、図11のように、「理想の自分を現実にする」と述べ強い決意などを表す際にも観察された。図12では、ドローンの操縦者とはまた別の監視者が必要ということ述べている部分で、「別のもう1人が」のところで、強調している様子である。



図11 こぶしをつくり、強い決意を表す



図12 「別のもう1人」を強調

腕全体を使ったジェスチャーも観察された。例えば、考え込むジェスチャーで、腕組みをしたり顎に手を当てたりする動作である(図13)。また図14のようにやや高圧的な態度を表すジェスチャーとして、腰に両手を当てる動作も確認された。さらには具体物を表すために、歌を歌う動作や「壁ドン」^{注8}を表す動作なども観察された。女性話者の場合、髪を触る動作も見られたが、単に落ちてきた髪を払う動作の場合と、女性

らしさを象徴するためのジェスチャーである場合と、両方が見られた。



図13 顎に手を当て、
考え込む



図14 高圧的に言う

4. うなずきと笑い

うなずきは、通常、会話で相手の話への肯定や共感を示す場合に見られるものであり、本稿で対象とする独話に見られるものをうなずきと呼べるかは、今後の議論が必要となろう。本稿でのデータでは個人差が大きく、話者によって、発話の終わりに深くうなづく動作が観察された。自分の話した内容に肯定的態度を示すような強調の機能があるのかもしれない。

また、笑いについては、どのデータでも基礎的な表情としてほほ笑みが見られたが、疑問や怒りなどの内容が話されている場合には、表情から笑みが消える場合があった。話し手の発話内容によって聴衆の笑いが引き起こされ、それに対して笑い返す場面もあった。

V. 考察

本稿での調査は、日本語パブリックスピーキングにおけるマルチモーダル分析を行うための予備調査として行われたものであり、パブリックスピーキングにどのような非言語行動が現れるかをリスト化することを目指したものである。その結果、多岐にわたる非言語行動が観察され、発話と合わせて、また発話のタイミングと合わせて見ることによって、話し手が意図した機能や意味が明らかになることがわかった。前述しているように、会話と異なりパブリックスピーキングには話者交替がなく、話し手と聴衆の相互作用も会話とは違う特徴があるため、非言語行動の機能も異なる可能性がある。

2020年に開催予定の東京オリンピックにおける招致活動では、プレゼンテーション戦略が大きい勝因の1つだと言われている^{注9}。この際のプレゼンテーションは、アスリートを始め東京都知事や首相などによって、すべて英語やフランス語で行われたものであるが、日本人のおとなしい話し方のイメージとは違う、ジェスチャーを多く含

んだプレゼンテーションが評判になった。中でも滝川クリステル氏のいわゆる「おもてなし」スピーチ(スピーチ自体はフランス語)において、滝川氏は図15のように、「おもて・な・し」と音声1つずつに合わせてゆるく結んだこぶしを顔の前で移動させ、さらには合掌して会釈までしたのであった(図16)^{注10}。

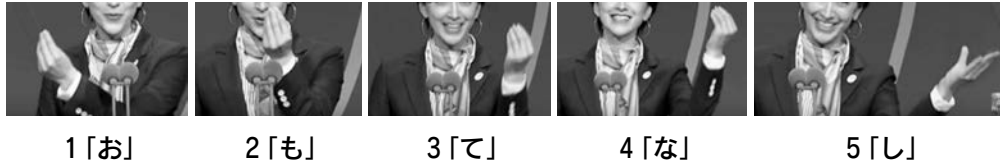


図15 「お・も・て・な・し」の一連のジェスチャー

日本では挨拶に合掌することは通常はないため、誤解を招くとの批判もあったが、大げさに見えるジェスチャーを交えたプレゼンテーションが印象的であったことは確かである。このように世界を舞台にしたスピーチで、しかも説得力を持たせることが必要だという場合、スピーチの内容はもちろんであるが、発話と非言語行動もあわせて効果を持たせていくことが必要となろう。



図16 合掌の挨拶

現実に、本稿でデータとしたスピーチ3「おもてなしって?」の冒頭は、この滝川氏のスピーチの模倣から始まっており、滝川氏のスピーチのインパクトの大きさを物語っている(ただし、データとしたスピーチは、日本のおもてなしを絶賛するものではなく、日本人の言うおもてなしというものに疑問を呈している内容である)。

上記の図15の5(お・も・て・な・しの最後「し」)では、手のひらを聴衆側に逆ハの字に広げる動作が観察される。これは前述した図6にもあるように、手を広げ「皆」を示すジェスチャーとして、本稿のデータでも多く観察された非言語行動である。この動作は、おもてなしが聴衆である自分たちに向けられるという印象を持たせる効果があったであろう。パブリックスピーキングで重要なのは、聴衆との共有の理解基盤を築いて話を進めていくことである(山路・深澤・須藤 2014)。このために「皆」に言及することは意味があり、それを表すジェスチャーがパブリックスピーキングに出現することは当然とも言える。

また、図10に示したのは、高齢化が進み維持が難しくなっている農業分野で、ドローンをもっと活用すべきであるのに、様々な規制がありそれがままならないという内容を話しているところで、話し手が視線を聴衆から外し遠くを見、さらにドローンを指差すかのようなジェスチャーを行なっているものである。この動作で、聴衆の視線も話し手が指差す遠くの方に誘導され、同時に聴衆は空を飛んで農業を散布しているド

ローンをイメージすることができているはずである。深澤他(2018)で主張されているように、パブリックスピーキングは本を読むことなどと違い、前に戻って確認することができないため、伝えたいことは様々な手段を使って聴衆の頭の中に繰り返し喚起させる必要がある。この目的のために非言語行動は、大きい役割を果たしている可能性があることが示唆されたと言えよう。

VI. 終わりに

以上のことから、今回明らかになった非言語行動の種類を基に、様々なジャンルのデータのマルチモーダル分析を行い、効果的な説得の要因を、スピーチの内容そのものに非言語行動も加えた全体像から明らかにしていくことは意味があることと思われる。

また、今回使用したデータは日本語の弁論大会およびスピーチコンテストのスピーチデータで、敢えて日本人話者(日本語母語話者)によるものと、外国人話者(日本語非母語話者)によるものの双方を利用した。今回のデータの範囲では、正確な数値の記録はしていないものの、明らかに、外国人話者の方が非言語行動の頻度や種類が多く観察された。これが文化的な差によるものなのか、日本語の弁論大会の種類による差異なのかは、今回のデータでは明らかにできないため、今後の課題の1つとなろう。

【謝辞】

本稿は、平成28年度科学研究費基盤研究(C)「グローバル化時代のパブリックスピーキングにおける「説得」の諸相」(16K02807)の助成を受けている。(研究代表者：深澤のぞみ、研究分担者：山路奈保子、須藤秀紹)の助成を受けている。

【注】

- 1 金沢大学人間社会学域国際学類
- 2 日本経済新聞Webサイトより(「ハングリーであれ。愚か者であれ」ジョブズ氏スピーチ全訳 <https://www.nikkei.com/article/DGXZZO35455660Y1A001C1000000/>, 2019年1月9日アクセス)
- 3 アリストテレスの『弁論術』では、説得には、ロゴス(論理)、パトス(感情)、エートス(倫理)の要素が必要であるとされている。
- 4 平田は演劇の世界で「本当にその俳優の身体から出てきたような台詞」を身体性のある台詞だと言うと述べている。また、松井は話し手の経験や考えと直接つながっている「お腹から出てきた言葉」が、言葉の「身体性」だと述べている。
- 5 メタディスコースは、Hylandが提唱している学術文の中で書き手が自分の主張や態度を読み手に効果的に伝えるための方策をさす。

- 6 パブリックスピーキングの例として、人気のあるTED (Technology Entertainment Design) カンファレンスにおけるスピーチでは、演台を使わずに壇上に話し手が立ち、大きいスクリーンにスライドを映し出しながら、スピーチを進めていくことが多い。話し手がビジュアルエイドを使っていることや、壇上を歩き回るなどことなど、研究の視点となることが多いため、今回はあえて演台で話をしているパブリックスピーキングのデータを用いることにした。TED Talks は、ウェブサイトで公開されている。(https://www.ted.com/#/, 2019年1月9日アクセス)
- 7 ELANはウェブ上から無料でダウンロードすることができる。
https://tla.mpi.nl/tools/tla-tools/elan/download/, 2019年1月30日アクセス
- 8 恋愛場面で、男性が女性を壁際まで追い詰めて、壁を「ドン」とする行為を指す。
- 9 2020年東京五輪・パラリンピック招致委員会と東京都がまとめた招致活動報告書による。http://www.shochi-honbu.metro.tokyo.jp/reppdf/TOKYO2016_Bid_Report.pdf (2019年1月30日アクセス)
- 10 ANNnewsfCHのYouTube画像による。(https://www.youtube.com/watch?v=6hgggyKWwhg, 2019年1月30日アクセス)

【参考文献】

- Goodwin, Charles. 1981. *Interaction Between Speakers and Hearers*. Academic P.
- Hyland, K. 2005. *Metadiscourse*. Continuum.
- Kendon, Adam. 1967. "Some Functions of Gaze-Direction in Social Interaction." *Acta Psychologica* 26: 22-63.
- 今井芳昭. 2018. 『説得力 社会心理学からのアプローチ』. 新世社.
- 伊藤崇・関根和生. 2011. 「小学校の一斉授業における教師と児童の視線配布行動」. 『社会言語科学』 14 (1): 141-53.
- 山路奈保子・深澤のぞみ・須藤秀紹. 2014. 「パブリックスピーキングにおけるコンテキスト共有-「ビブリオバトル」の導入部の観察から-」. 『2014年度日本語教育学会春季大会予稿集』.
- 平林由紀子・北原義典. 2014. 「説得力の強いスピーチにおける話者の動作と音声の特徴解析 (ヒューマンコミュニケーション基礎)」. 『電子情報通信学会技術研究報告 = IEICE Technical Report: 信学技報』 113 (462): 45-49.
- 平田オリザ・松井孝治. 2011. 『総理の原稿 新しい政治の言葉を模索した266日』. 岩波書店.
- 東照二. 2006. 『歴代首相の言語力を診断する』. 研究社.
- 楊鶴・松田里沙・水落理子・木田剛. 2015. 「政治演説の含意と談話ストラテジー - シャルリー・エブド事件に対するオランド大統領の演説分析 -」. 『筑波大学フランス語フランス文学論集』 30: 94-119.
- 深澤のぞみ・山路 奈保子・須藤 秀紹. 2018. 「日本語パブリックスピーキングにおける説得の特徴?? 書評ゲーム「ビブリオバトル」の観察から??」. 『日本コミュニケーション研究』 47 (1): 25-45.
- 深澤のぞみ・ヒルマン小林恭子. 2012. 「パブリックスピーキングとしてのアカデミックプレゼンテーションにおける聴衆重視の仕組み: 式辞スピーチとの比較から」. 『応用言語学研究論集』 6: 40-53.
- 籠宮隆之・山住賢司・楨洋一・前川喜久雄. 2006. 「聴取実験に基づく講演音声の印象評定データの構築とその分析」. 『社会言語科学』 9 (2): 65-76.
- 高梨克也. 2016. 『基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法』ナカニシヤ出版.

A Pilot Study for a Multimodal Analysis of Japanese Public Speaking

Nozomi Fukasawa

Abstract

To succeed in persuading audiences in public speaking, not only the contents of speeches but also the nonverbal behaviors are important. This paper is a pilot study for a multimodal analysis of public speaking. For this purpose, we observed various nonverbal behaviors, such as gazing, gestures, nods, and smiles, which were used by speakers of speeches, and we described the characteristics. In these nonverbal behaviors, we found that there were various kinds of hand gestures. When we analyzed these gestures in relation to the speakers' utterances, we also found that the gestures had different functions during speeches. It can therefore be concluded that hand gestures can play a part in persuading an audience.

Keywords

public speaking, multimodal analysis, nonverbal behavior